

○議長（門脇直樹君） 会議を再開いたします。

2番議員の一般質問を許します。2番山本優人君。

○2番（山本優人君） 皆さんおはようございます。議席番号2番、山本です。

通告に基づき、一般質問します。

はじめに、高齢化の現状と対応について。

内閣府の高齢社会白書によれば、2020年度現在、65歳以上の高齢人口は総人口に占める割合が28.4%ですが、秋田県は高齢化トップの37.2%、そして2030年には八峰町の推計は確実に超超高齢化社会に突入し、55%弱と推計されています。全国のトップを行く八峰町は、町民の減少、高齢化による地域社会の課題は大変厳しい状況にあります。

こうした中、社会との接点に乏しい高齢者の孤独死のニュースをたびたび報じられることがあります。周囲に存在さえ知らないまま餓死や病死するケースも報道されており、社会問題として取りざたされています。胸が痛むところであります。

高齢者世帯は、家族、地域、社会との接触が少なく、交流が客観的に見て著しく乏しい状態であり、介護保険、生活保護などの必要な行政サービスを受けていないなど、社会的に孤立している状態にある場合もあります。いわゆる社会的孤立のリスクが高く、加えて生活困窮者や認知症を含めた健康状態に問題がある人は、さらにそのリスクが高まると強く懸念されます。また、一人暮らしの高齢女性の貧困率はとても高く、年金額の影響を最も受けるという報告もあります。生き生きしている親族がいない、近所付き合いがない、盆正月を一人で過ごす高齢者単身者世帯も増えており、高齢者を社会から孤立させずにいかに支援していくかが社会的な課題であります。住み慣れた地域で継続して安心した生活が営むことができるという観点から、高齢者の孤立化を防止する取り組みは一層必要はらずであります。

一人暮らしの現状と高齢者の孤立化を防止する取り組みの展開はどう考えているのか、お尋ねします。

また、介護保険制度が始まった頃には、どちらかといえば寝たきりの問題への対応が優先され、認知症への対応は遅れることからスタートしております。活発に動ける人ほど行動範囲が広がり、長時間の見守りが必要になります。全体的に認知度が低くなるとサービスが制限されてしまいます。独居老人の場合には、家事の不便や貧困、精神的孤独や病気になっても援助、世話、介護に対処してくれる人がいないという状態に陥ることになります。そして、どちらかといえば家に閉じこもりがちになる傾向が見られます。

一人暮らしの人が認知症の疑いにあった場合に行政の手が届いているのでしょうか。また、認知症への対応はどのようになっているのでしょうか、答弁をお願いいたします。

次に、地域おこし企業人について。

総務省では、地方公共団体が三大都市圏に勤務する民間企業の社員を一定期間受け入れ、そのノウハウや知見を生かして、地域独自の魅力や価値の向上、安心・安全に繋がる業務に従事してもらうことで地方への人の流れを創出することを目指す「地域おこし企業人交流プログラム」を推進しています。これは、受け入れるまち、派遣元企業、双方にメリットがあるプログラムです。

地域おこし企業人の受け入れるまちにとっては、派遣元企業のノウハウや人脈を生かした地域活性化、課題解決の取り組みを展開し、民間の経営感覚やスピード感覚を取り入れることで地方創生の総合戦略に掲げる目標を早期に達成するための戦略的なパートナーを得ることができると期待されております。また、職員の意識改革にも繋がることなどが期待されるなど、一般的な今までの委託事業と異なり現場に企業人が投入されることから、目的達成に向けた士気が高まることも期待でき、派遣元企業にとっては社員の人材育成や地方圏との人的交流、人脈構築だけにとどまらず、地域の潜在的資源を生かした新たな事業展開を見据えた行政との連携、課題、最先端の地域の住民との協力を行うことにより新たなビジネスモデルを構築するなど、経営戦略のツールとしての活用が考えられるとあります。

先日、さきの全員協議会においてハタハタ館の中間決算の報告があり、収支改善が図られるとの報告がありました。ですが、コロナ対策によるGo To Travel、宿泊補助券などによる一時的なものであり、経営体質は変わっていないと考えられます。一昨年1,600万円、昨年2,000万円と赤字経営状態で、資本金も9,500万円から800万円までになっております。この累積赤字は極めて大きい金額だと私は思います。どうしても社長と町長が兼務のために、赤字になったら町から補填や支援をすればいいという甘い考えになって、そのため経営危機感が鈍化してきた結果であると考えます。私は、ハタハタ館は町にとってはなくてはならない、町の活性化を図る非常に大事な施設と思っておりますが、今こんなことになってしまっていることは非常に残念であります。

そこで、道の駅の指定変更に伴う環境整備やハタハタ館等の改修計画のプランニングに際し、宿泊・観光事業に関わっている企業のアドバイスを受け、ハタハタ館及び周辺観光の整備を図るために「地域おこし企業人」の募集、採用の考えはないのか、答弁を

お願いします。

以上2点であります。

○議長（門脇直樹君） ただいまの2番議員の一般質問に対し、当局の答弁を求めます。
森田町長。

○町長（森田新一郎君） 山本議員のご質問にお答えします。

はじめに、「一人暮らしの現状と高齢者の孤立化を防止する取り組みの展開」についてお答えします。

八峰町の高齢化率は、昨年の7月1日現在、48.4%となっており、この5年間で5.1ポイント増加しています。また、「一人暮らし世帯の割合」は、昨年の7月1日現在、36.2%となっており、この5年間で9.8ポイント増加しています。

高齢化率や「一人暮らし世帯の割合」については、今後も増加することが見込まれ、高齢者の社会的孤立の問題や認知症にかかってしまう方々の増加など、地域における福祉需要はますます増大していくものと認識しています。

このような状況の中、現在町では、高齢者の社会的孤立を防ぐため、ヘルパーが定期的に訪問し日常生活状況の把握を行う「一人暮らし老人等見守り事業」、湯っこランドを利用した「生きがいデイサービス」、安否確認を含め週3回弁当を配達する「配食サービス」、住民主体で軽い運動やゲーム等で楽しい時間を過ごしていただく「通所型サービスB事業」に取り組んでおります。

さらに、社会福祉協議会においても、埴川健康センターで月2回実施する「ミニデイサービス」、地域において孤立や不安の解消を図るための「ふれあいいきいきサロン」の開催、心配事や緊急時に通報できる「ふれあい安心電話」の設置のほか、老人クラブや民生委員による訪問活動も行っております。

次に、「認知症への対応」についてお答えします。

八峰町において、認知症にかかっている方々がどのくらいいるのかについては正確には把握できていませんが、厚生労働省によると、令和2年の65歳以上人口の認知症発生率は17.2%ということですので、八峰町の65歳以上人口、3,154人の17.2%、540人くらいは認知症にかかっているのではないかと推測されます。

認知症の予防については、様々な研究において、食生活、適度な運動、便秘予防などが効果的とされており、八峰町においても様々な取り組みを進めています。

「八森峰浜ふくし会」において、高齢者用トレーニングマシンを使って運動機能向上

を図るため実施している週1回の「通所型サービスA事業」や、週2回の「通所型サービスC事業」をはじめ、認知症の初期症状がある方を医療に結びつけるため、「認知症初期集中チーム」を設置しメンバーである「医師からのアドバイスを受け支援する事業」や、地域において認知症への理解を促進する「認知症地域支援推進員」による「認知症カフェ」の実施、平成26年度から実施している「認知症サポーター養成講座」などあります。

特に「認知症サポーター養成講座」においては、今年度、八峰中学校2年生と老人クラブの女性委員を対象に実施し、町内の認知症サポーターは415名となっております。

また、認知症となった時の医療機関の受診方法や、相談窓口等を記載した「認知症ケアパス」を作成し、今年度中に役場や社会福祉協議会など関係機関窓口へ備え付けることとしています。

さらに、今年度は新型コロナウイルスの影響により実施できませんでしたが、認知症の診断を受け在宅で生活している方を対象に、平成31年度より国際医療福祉大学大学院の協力を得ながら「八森峰浜ふくし会」に委託している認知症の家族を対象とした「認知症あんしん生活実践塾」についても、来年度は新型コロナウイルス感染症予防対策を行いながら、是非実施したいと考えております。

また、来年度から、認知症になっても住み慣れた地域で安心して生活が送れるよう、成年後見制度の利用促進を図る中核機関を立ち上げ、権利擁護支援体制を強化することとしております。

いずれにいたしましても、高齢者の社会的孤立や認知症の問題については、ともすれば他人事になりがちであります。地域住民や地域の多様な主体に参画していただきながら、「我が事」、「まるごと」の精神で取り組んでいくことが重要であると考えております。

次に、「地域おこし企業人」についてのご質問にお答えします。

地域おこし企業人は、「地域おこし企業人交流プログラム」として、地方公共団体が三大都市圏に所在する民間企業等の社員を一定期間受け入れ、企業で培われた人脈やノウハウ、知見を生かし、地域独自の魅力や価値の向上等に繋がる業務に従事してもらうプログラムであります。

受け入れ期間は6カ月以上3年以内となっており、受け入れができる活動地域には八峰町も含まれており、秋田県内でも既に受け入れしている自治体もあると聞いています。

道の駅「はちもり」を現在の「お殿水」の所からハタハタ館エリアへ移転することについては、秋田県と国土交通省の関係機関との協議や調整を経て、「道の駅の移転については、道の駅としての機能を満たすことを条件として認められる」という回答をいただいております。

町としては、ハタハタ館を中心とした御所の台エリアは、「あきた白神体験センター」、「産直ぶりこ」、「御所の台ふれあいパーク」など多くの施設が集中しているエリアであり、八峰町を元気にするための大きな拠点になる所であると認識しております。

したがって、来年度実施することとしている「道の駅はちもり移転に向けた懇談会」については、単なる道の駅の移転ではなく、最終的にはこのエリア全体の整備内容をどうするのかまで踏み込んでいければと考えています。

これまでも、ハタハタ館、あきた白神体験センター、産直ぶりこ、地元ガイドの会の代表者、オートキャンプ場管理人、商工会、観光協会のほか、JRや県内バス事業者、観光DMO組織等の観光事業者で構成する「御所の台ふれあいパーク活用意見交換会」を開催しておりますが、今回の懇談会については、これまでのこのエリアをどうするかという漠然とした意見交換ではなく、実際に道の駅「はちもり」がこのエリアに移転されてくるという大きな事実を踏まえた具体的な意見交換が行われるものと思います。

懇談会に出席する方々の立場から、道の駅「はちもり」のハタハタ館エリアへの移転により、基本的な道の駅の機能である24時間利用可能な駐車場やトイレなどのほかに、自分たちにメリットが及ぶようにするためにはどうすればいいか、例えば、それぞれの施設とどのような連携を図ればいいのか、このエリアを訪れる大型観光バスにとってはどのような施設であればいいか、町全体の観光や商工業の振興のためにはどのような機能や仕組みが必要かなどについて意見交換できればと思っています。

私としては、いきなりコンサルタントに委託するのではなく、まずはこのエリアに関係する皆さんから様々なご意見を伺うことが基本であると考えます。その上で、観光商品の開発や他産業との連携などの専門的な知見が必要になれば、議員ご提案の「地域おこし企業人」の活用も図りたいと思います。

私は、町長であります。ハタハタ館の指定管理をしている「ハタハタの里観光事業株式会社」の社長も兼ねておりますので、今回の道の駅「はちもり」の移転が、ハタハタ館の安定的な経営に繋がり、ハタハタ館を今後も守っていくことに繋がることを当然ながら期待しておりますが、今回の懇談会でいきなりハタハタ館の経営改善もテーマにす

れば、経営面を専門とする別の分野の専門家も必要になりますので、意見交換の議論が広がってまいりますし、議論がかみ合わないことも想定されると思っています。

ハタハタ館の経営改善や老朽化が進んでいる施設の改修などについては、今回の懇談会とは別に、今年度から行っている「教育産業建設常任委員会」の皆さんからご意見をいただくとともに、必要に応じて議会全体からもご意見を伺いながら進めてまいりたいと考えています。

○議長（門脇直樹君） 2番議員、再質問はありませんか。2番山本優人君。

○2番（山本優人君） 高齢化問題、そして認知症の問題、これは非常に範囲が広くて、また非常にやることもまた多過ぎるという事業なんですけどね、私も非常にその点に関しては頑張ってもらってるなというふうに思うわけですが、ところでですね、うちの方に、まあうちの自治会の中に一人暮らしの男性が約5人いるんですよ。かなり年っている人は72歳かな、下の方はまだ若干五、六十代がいますけど、いずれ年とってくると、一人暮らしだもんですから、ちょっと見なければいってる可能性あるわけですね。そういうことですね、じゃあ誰がそれを心配するのかっていうことになってくるんですけども、私そのものの考えはですね、町内、町内というか、その地域に万遍なく年いった段階、まあ年寄りから若い者まで万遍なくいる姿が一番の理想だなというふうに思ってるわけですが、そうした中で、じゃ、どうすればいいのかっていうことなわけですが、やはり今、町なり何だ、社協がやってる事業そのものもいいわけですが、やはりその自治会の中にそういうふうな繋がりをもった集まりというか、こう集まる機会をつくることこそが必要なんではないかなというふうに思ってるわけですよ。そういうことが、ゆくゆくはその地域の活性化というふうなことに繋がるという考えですけど、それがだんだんだんだん一人暮らしになって動けねぐなれば、もうホームさ行く、あっちゃこっちゃデイサービスさやる、そういうふうになってしまってるので、どんどん地域から人がいなくなってしまう。ですから、まあいろんなそういう対策もしてもらってるのはまあ非常にありがたいことだけでも、やはり地元の地域内でそういう集まり、例えば昔、今の時期であれば彼岸の祭り、彼岸の祭りではねえけども、彼岸なれば、まあ念仏講とかっていう墓所の周りで、ばばあ方が集まるわけですよ。で、その集まった所に子どもらが行って菓子をもらったりですね、いろんなまあ悪さしたり、遊んでるわけですね。やはりそういうふうな地域行事というものをこうやる。そういうふうな所には積極的に町が応援してやって、そういう機会をつくるということ自体が活性化

というふうなことに繋がるのではないかと。そういうことによって、地元の年寄り、高齢者もみんなこう出て歩けるし、まだちゃんと生活できてるんだなということを理解できるというふうに考えるわけですよ。ですから、その辺のところをまず考え方としてどうか、町長に答弁をお願いします。

○議長（門脇直樹君） ただいまの再質問に対し、当局の答弁を求めます。森田町長。

○町長（森田新一郎君） 八峰町の中では、やっぱり高齢化がかなり進んできてまして、高齢化対策っていう部分も、まあほかの地域よりも進んでいるなという実感を持っております。

で、高齢化問題考える時、2つの分野からアプローチが必要です。万が一の時にどうするかという。まあこれについては、社協の方で一人暮らしの方々の部分の万が一の時の連絡先とか、そういう部分をお知らせしてもらって、一人一人のネットワークつくってます。で、その隣の父さんだったり、遠くにいる家族だったりとかそういう形のネットワークをつくって、各自治会の方、会長さんの方にリストを渡してあるはずですよ。そういう部分を、あと民生児童委員の方々も回りながら、まあそういう方々、あと町の事業でも一人暮らし家庭の中で特に心配な方の部分については、町の事業で社協のヘルパーが回ったりとかってそういう取り組みをしています。で、それがまあ万が一の時のための部分と。

もう一つは、やっぱり元気な時にどうやって楽しんでもらうかっていうようなそういう部分。まあ議員も先ほど来いろいろお話なつたとおりであります。で、私は、地域主体で、まあ通所型サービスBっていうんですが、自分が住んでいる町内会ですけど、毎月10日の日とその通所型サービスBの集まる日です。で、毎回20人近く集まって、まあいわゆるラジオ体操したり、ゲームをしたり、お茶を飲みながら、あるいはコロナ禍が終われば今度酒を飲む計画もあるようなんですが、私も日曜日に当たれば出たいと思ってるんですが、なかなか日曜日に当たらないもんですから出れないんですけど、そういう部分を、まあ定期的に集まるような所を是非全自治会にやってもらいたいなというような形が思っています。引きこもっていることが一番容易でないです。1週間寝たきりなれば歩けなくなります。本当にそういう部分については見守り活動をしながらか、そして元気なうちは定期的に集まれる場、そういう部分をつくっていくということが高齢化対策の基本であります。

もう一つの一番根本は、心と体の健康づくり。介護予防教室とか健康教室、こういう

部分をどんどんどんどん町が積極的に開催していくってことも高齢化対策としては必要なことと考えています。

○議長（門脇直樹君） ほかに質問ありませんか。2番山本優人君。

○2番（山本優人君） 非常に頑張ってもらってることはありがたいなと思ってるわけですが、是非ですね、その地域のそういう活動をもっとこうやってもらえるような支援をしてもらえればいいなというふうに思います。

あともう一つはですね、この高齢化対策で何を優先的にやればいいのか。まあ全部優先なんだけど、特に見守り必要がなのか、例えばですね買い物が必要なのか、日常の足が必要なのか、どれかかれか、全部必要だけど何かこう重点的にやっていくっていうふうなものを光らせてっていうか飛び抜けてやるっていうことも、これ町としては必要なんではないかなと。何でもオールマイティにやれるっていうふうなことではなくてですね、まあこれだけは八峰町は優れてるというふうなところを特化してやるっていうこともまた八峰町を住みやすくする一つの手法ではないかなというふうに考えるわけです。まあそういった意味で、例えば一つのアイデアですけども、認知症の検査、まあ540人ほどいるかもしれないという話してましたが、認知症の検査をしてみるとかですね、そういうふうなことで実際のところはどうなんだと、認知症対策しっかりやるというふうなことでもいいわけですよ。

実を言うとですね、自分の自治会の話ばかりなるわけですけども、認知症らしき高齢者の人がいてですね、毎日、何ですか、土産持って同じ家に行って困ってるわけですよ。来てもらう人、毎日来るわけですからつらいわけですね。断るわけにもいかないし。で、鍵かって最近は来ないようにしてるけども、それでも毎日玄関を叩かれるというふうな、まあもろに認知症だということなんだすな。まあそういうことから、じゃあこの後、その認知症、この人をどうしていけばいいのかということですけども、さきに言ったように大きくいっぱい集まったらどこに人を集めれば、その高齢のばあさんも特定の人ばかりと付き合わなくて全体的に付き合えるというふうな形になるわけですけども、そういうふうな解決策というふうなものもあるんだろうと思うわけですから、その認知症の検査等してもらおうような考えはないかということですが、どうですか。

○議長（門脇直樹君） 当局の答弁を求めます。森田町長。

○町長（森田新一郎君） 大きな2つの質問だったように思います。

まず極端な高齢化が進んでいる町の中で、どういうことが必要なのかという部分は、

私は、これまで誰も経験したことのないような高齢化の状況になってます。女性に限って言うと53.7%になってますので、半分、道で会う女性の方の半分以上が65歳以上というふうな状況です。男性はそれよりも低いんですけど、これまあ早く亡くなってしまいうからという結果なんですけど、こういう社会の中で地域コミュニティを維持していくためには、今まで65になったからあと隠居するとかそういうもんじゃなくて、社協時代からずっとやってきてることなんですけど、いつまでも元気で、今まで培ってきた経験、知識、知恵などを地域社会に生かしていかなければいけないと。そのためには心と体の健康づくりが大切だということをお願いし申し上げてきました。そういう部分について、町長になってからも、いわゆる退職者がいないけど保健師を3人採用したりとかそういうふうな取り組みで、そういう健康教室とかそういう部分を社協に委託している地域包括支援センターの方では介護予防教室とか、そういう部分を積極的に展開していくっていう、これがまず一つだと思います。

それから、認知症。これ認知症の一番の特徴は、認知症だと思われる人、自分は認知症だと絶対認めません。ここが一番問題なんです。で、そのために集中チームで医師も入れながら、どういうアプローチすればいいのかという形の中で進めていきますので、まあそういう部分は、まず周りの人方がその認知症にかかっている方々の部分への対応をどうしていくかっていう部分が、これ学ばなければいけません。その部分にするために、私が社協の会長を拝命をした時に認知症サポーター1人もいないっていうふうなそういうお話を受けてびっくりしました。早速認知症サポーター講座を展開するっていうふうな形の中で、私もオレンジリング持ってます。講習を受けて受け取ったんですが、そういう認知症への理解を地域全体で進めていくっていうことがまず一つ必要です。今回、中学生と、それから老人クラブの女性会員の皆さんの方にも受けてもらいましたけれども、今450名ほど、あ、十何名ほどですか、それをもっともっと増やしていかなきゃいけないなというふうな、認知症への理解を住民全体に広めていくっていう方向と、あと認知症にかかっている人は絶対自分は認知症だと認めないので、どうやってお医者さんに連れていくかっていうのが最大の課題です。ここが一番難しいので、これはこの後も引き続き、町の保健師等も含めてですね関係機関と連携しながら取り組んでいかなければいけないなというふうな形で思ってます。

あとは、この前、今年は何も聞けなかったですが、おとしですか、あるフォーラムで、適度な運動と水を何リットルぐらい飲むと認知症にかからないという、それで海光苑が

そこの部分では全国一すばらしい所だと。認知症になっても海光苑に入って治って、また在宅さ帰って行って、また悪くあれば海光苑さ戻ってくるというふうなそういうことができている施設が日本の中でただ一つ海光苑があるっていうお話を聞いて、私は本当に胸が踊る思いをしました。まあそういう形の中の取り組みをやっていけばいいなというふうな形で思っています。

○議長（門脇直樹君） ほかに質問ありませんか。2番山本優人君。

○2番（山本優人君） もう一つだけですね、まあ先ほど成年後見人制度、今年から、まあ今年っていうか新年度からやるっていうことなんですが、先日テレビでショッキングなニュースありましたよね。ケアマネージャーがポケットじゃねえ、ねこばばしたと。まあああいうようなことがないようにしてもらいたいわけですが、ただ、その新しい制度等を含めてですね、社協さほとんど丸投げしているような状況がこのままでいいのかなと。本当に社協がそれに応えて、今までのプラスまたプラスなるわけですからね。ですから、そういうふうな町の下請事業者みたいな格好でこのままずっと続くのかどうか、それとも新しいそういう組織が必要とされてるのか、その辺尋ねます。

○議長（門脇直樹君） 当局の答弁を求めます。森田町長。

○町長（森田新一郎君） 成年後見制度、これかなり前から国の方で進めようと、裁判所の人方がいろんな所で講演したり、そういう活動をしております。なかなか進まないんですけれども、これにかわるような形で権利擁護事業っていう形で、施設に入所してる人方の通帳を社協の方で管理したり、これ県社協の事業を受けてやってる話なんですけど、そこの部分でも、やっぱりその入所してる方の貯金目当ての親族の方々が来て、通帳をよこせとかってトラブルがたくさんあります。そういった部分については、今後でも取り組んでいかなければいけないというような形で思っています。

それと社協と町との関係ですけど、ようやく今年かな、昨年度ですね、町の福祉活動計画と、それから社協の、町の福祉計画でしたっけ。

（「地域福祉計画」と呼ぶ者あり）

○町長（森田新一郎君） 地域福祉計画と社協の地域福祉計画という部分が一体となったものを作りましたので、町の考えと連動した形で社協が動くというふうな形で計画の中で仕組みができましたので、そういう中でやっていきたいなというふうな形で思っています。全て町の方で引き受けてやっていきますと、この後、職員の数をどうしていくかっていう部分の問題ある中で、どんどんどんどんそういう専門職の方々が増やしていくっ

ていうのはなかなか難しい話ですので、社協の方をお願いしながら、社協の方もパワーには限界あるので、その辺に新しく人を雇う部分については人件費を町で補助したりっていうふうなそういう対応の仕方をしているところです。

○議長（門脇直樹君） ほかに質問ありませんか。2番山本優人君。

○2番（山本優人君） いずれこの社会福祉、非常に範囲が広くて大変だと思うわけですが、優秀な人材をですね社協の方に入れてもらって、ちゃんとしたケアをしてもらいたいというふうに要望します。ということで1問目の質問は終わります。

次の企業人の問題でありますけども、まあ何度となくハタハタ館問題については議論されてきました。今回、来年度、まあ再来年度でも受けてですね道の駅が移転をするという機会に当たるわけですが、長年、今までの道の駅がああいう、まあほかの観光地と比べて見劣りするような部分からですね、ハタハタ館に移転することによって観光地化されるという期待感があるわけですね。で、なおかつ、運悪くですねハタハタ館の運営がここ3年間赤字と。しかもまた去年はコロナでまた最悪の状態というふうな中でですね、ハタハタ館の存続そのものに関わってきてるわけです。まあそれと隣の体験センターも、長年教育施設だと言いながらもですね、町の持ち出しが非常に多い施設であります。そういったことですね、あそこら辺を整備しなければならない状態だわけですが、今回、道の駅が移転することによっての起爆剤イコールですね最後のチャンスなんですね、実を言うと。今すぐハタハタ館の改修をどうのこうのという問題ではありませんけども、やはりこの道の駅移転に伴ったチャンスととらえてですね改修、その動線、道の駅の動線をちゃんとしておかないと、ハタハタ館との観光整備が図れないと。で、立ち上がりもできないというふうに考えるわけですよ。ですから、まあ町長先ほど最終的にはそこまで考えるということは答弁の中にあっただんですがね、その前、その段階として、一緒になって企業の知識のある企業人と一緒に考えていかないとですね、道の駅の部分はこう考える、その後は次、ハタハタ館の施設整備はこう考えるという、あまりにも段階的に踏んでいくとですね時間がかかってしょうがないわけですよ。やはり将来的にこの10年間はいい、ここは観光地としてやれるというふうな構想をもちながら、じゃあ道の駅はこうあるべき、その道の駅に対する出店者はこういうふうな出店者というふうなプランをもって俺はかかるべきだと思うわけですよ。ていうのは、そのための企業人というのには、例えばJTBでもいいし、あ、JTBでねえ、それから例えばJALパックでもいいし、いろんなそういう旅行の代理店っていうんですか、企画会社みた

いなのがあるわけですね。そういうふうな所のヘッドハンティングっていうか出向してもらって、そういう、どういう施設であればこの10年間観光的にはもつんだというふうなアドバイスをもらい、して、それに合ったプランをそちらの会社と一緒にやってもらえば、そこに集客ができるわけですよ。それが結局ハタハタ館の集客に結びついたり、地元のいろんな土産品の開発に繋がったりするわけですよ。ですからそういうことから私は最初っから、今、道の駅構想移転、その段階でそういう知識を持った人を引っ張ってきたらどうかということで提案してるわけですが、まずはじめにその辺のことを聞きたいと思います。

○議長（門脇直樹君） 当局の答弁を求めます。森田町長。

○町長（森田新一郎君） ハタハタ館については、本当に私町長になってからずっとマイナスの部分の結果で本当に申し訳ないんですけど、今年も先ほど議員お話になったように結果は黒字になると思うんですが、これは本物ではありません。これはいろんな国、県、町の支援策があってそういうふうな形になるんだと思いますので、まあそれはそれ、あれですけど、最初からこの懇談会にそういう首都圏の企業人をこう入れたらどうかというふうなお話なんですけど、私はまず、まず関わりがある人方から聞くのが一番先だなという感じに思ってます。今までは漠然とした形で、あそこの御所の台エリアどうするって形の部分の議論だったように思うんですが、今回は道の駅がここにやってくるぞというふうな形の中で、自分たちの部分にどういうふうな形にすればメリット得られるのかっていう部分を伺いながら、これが最初だと思います。いきなり、JTBの人を悪く言うつもりはありませんけれども、来てもらった時に何をどうしてほしいのかっていった時に、ハタハタ館って部分をいわゆる10年先までもっていけるような、守っていけるようなそんなプランニング欲しいんだって言っても、その人がハタハタ館のこれまでも分かりませんし、そう簡単にはいかないと思います。だから具体的なこういうことをしてほしいというふうな形のこうものが出てくれば、そういう部分に合わせた人をどうやって来ていただくかっていう部分がそういう順番だろうと思います。

この問題、確かに議員おっしゃるとおり、まあすぐこう急がなきゃいけないんですけど、でも私的には、本当に今まで3年間、この部分、急ぎたくても急がなかった部分がありましたので、まあいずれこの部分については今申し上げたように、まず関わりのある人からお話聞いてから、その上で展開を図っていく必要があると思います。

○議長（門脇直樹君） ほかに質問ありませんか。2番山本優人君。

○2番（山本優人君）　まあいきなりというのは、冒頭からそういう入りということではないですよ。ただですね、今まで地元の商工会やいろんな団体とか出てるわけですけども、結果的に地元の商店を使うことによって今の現状がそういうふうになったわけですよ。そうでなくて、そこにはやはり核となる運営のコンセプトがはっきりしてないからどっちつかず、地元のトップの顔色ばかりうかがってですね問題点を指摘しないまま来てるからこういうふうなことになってしまった。やはりそこはちゃんと第三者の目を見て検証して、しっかりした経営をするようなことを考えないと駄目だわけですよ。だからそういうふうな状況把握をしてもらうためにもですね、第三者的な意見を取り入れ、そういうことが私は必要だと思うわけです、運営のためには。まあそこら今度は周辺の整備の部分もあるし、問題、ハタハタ館そのものの運営がしっかりしてもらわないと、いくら改修してきれいな建物にしてもですね、もたないわけですね。ですからそこいら辺はやはり経営ということ、今後の10年間の経営ということ考えた時には、今一緒に来てもらって問題点を抽出してもらおう。今までやってきてることがここだからやはり下降線だと。ちょっとこの辺を変えればもっと上がりますよというふうなアドバイスは一緒になって考えていかないと駄目なんでないかと、私は思うわけですよ。どうでしょうか。

○議長（門脇直樹君）　当局の答弁を求めます。森田町長。

○町長（森田新一郎君）　今回予算提案している懇談会の部分は、やっぱりその繰り返しになりますけれども、この御所の台エリアに関係する人方でまず最初にやりたいなっていう形の思いです。ハタハタ館の経営改善の部分については、また別の形で別立てで、これとは別な形で並行して進めなきゃいけないことだと思ってます。まあこの後、中間決算は9月まで出ましたけど、この後3月末の部分の本決算出ますので、その段階でまた教育産業建設常任委員会の皆さんとご意見を伺いながら、あとその中で専門家のアドバイスも必要であればそういう形の部分も取り入れながらやりたいと思ってますが、その部分については懇談会とやっぱり別な形で一緒にいかなきゃいけないなというふうな形で思ってます。

ただ施設の部分で、全協の時にもお話しましたけれども、ハタハタ館、まあ私、今年度になってからもう100回以上もレストランで昼飯食ってるんですけど、その都度、事務所に寄ったりして声かけてくるんですが、その時にやっぱりお客さん、お金を払って泊まるお客さんと、それからお湯に来るお客さんが同じフロントの前通るもんですから、

その辺がいろいろお金を払って泊まるお客さんからクレームが出てるとか、いろんな課題を聞いてます。そういう部分をどうしていくかっていう部分を問題意識持ちながら、入り口をどうするかの部分も道の駅のこの今回の部分の中でハタハタ館側から当然意見として出されると思いますので、そういう部分を踏まえながら、いい結果になるような方向でやっていきたいと思っています。

○議長（門脇直樹君） ほかに質問ありませんか。2番山本優人君。

○2番（山本優人君） 経営問題はもちろんですけども、やはり整備が伴うわけですよ、将来的な。ですから、やはりその集客するための整備はどういう部分を注視して直したらいいのかということも、その企業人の知恵というものは俺は必要なんではないかなというふうに思うわけですよ。例えば、今、ボイラー室取っ替えるという予算つけました、つけましたってまだ決まっていませんが、まず3,000万円かかるわけですけど、本当はあそこの部分でない方がいいわけですよ。別個にボイラーの建物を造ってやった方が、あそこの位置から変更してぶりことの繋がりをつくった方が、もしかしたらいいのかもしれないです。ところが今もう進んでしまってる。こういうことが無駄な時間になるし、投資になるわけですよ。ですから、そういうふうな知見を持った人の知識っていうものがあいう改修には必要なんだということだわけですよ、私考えるに。ですから、その辺のことを、まあ今すぐにとは誰がどっからという交渉の問題もありますから無理ですけども、いずれ知識人は必要なかどうか、そういう求める気持ちがあるのかということをお尋ねします。

○議長（門脇直樹君） 当局の答弁を求めます。森田町長。

○町長（森田新一郎君） 端的に言いますと、必要だと思います。基本的に議会と相談しながらっていうふうなお話しましたが、それ以上にやっぱり専門的な知識が必要ですし、従業員の心構えもそういう形の中でやってもらわなきゃいけないので、必要だと思います。ただその部分について、今、山本議員いろいろお話してくれましたけれども、この3年間の部分については、私自身がやっぱり経営改善のきっかけをつかまないと、なかなか大規模改修の提案はできないんだというふうな形の思いがありましたので、まあそういう部分で、ただどうしても空調と合併処理浄化槽については、あれがうまくいかないとか経営そのものできないのであえてお願いした次第ですけども、全体の改修計画の部分については、やっぱり何とかこういう形でいけば経営改善っていうふうな形の道を見つけていかないとなかなか提案すらも難しいなという思いがあります。た

だいずれ議会の方にご相談しながらという部分と併せて専門家の知識も必要だということとは、私も十分承知しています。

○議長（門脇直樹君） ほかに質問ありませんか。2番山本優人君。

○2番（山本優人君） 最後に、今からですね必要であれば、もう特定の会社を決めるために探しておいた方がいいと思うわけですよ。例えばJTBでもいいし、星野リゾートでもいいし、まあどこになるんだか、まあHISだか、そういうふうな旅行会社もあったと思いますが、そういうふうな所をある程度探して、こういうふうなアドバイスもらいたいでもいいしですね、もっと優秀な職員がいるかもしれないし、それを今のうちに探したらいいと思います。

以上、終わります。

○議長（門脇直樹君） これで2番議員の一般質問を終了します。

休憩いたします。午後1時より一般質問を再開いたします。

午前11時54分 休 憩

.....
午後 0時59分 再 開